今月のトピックス

特集 会社訪問 -No.54
共同通運株式会社 様

組織化・DX 化を通じて会社を「見える化」将来の飛躍に向けて事業を推進

共同通運㈱（髙橋功代表取締役）は船橋市内に本社を構えるほか、各営業所の強みを生かした様々な輸送を展開する運送会社である。
髙橋社長は、社内の組織化、DX（デジタルトランスフォーメーション）化を通じて、社内の「見える化」を加速。次世代に向けた健全な発展に向けて、全従業員が心をひとつにして取り組むことのできる運送会社を目指している。

同社のトラックの前に立つ髙橋社長。同社では営業所ごとに多彩な車両を保有する

■5営業所体制で多彩な輸送を展開 営業所長への教育を進め体制強化を図る

共同通運㈱は、髙橋社長の父親によって昭和 56 年に設立された運送会社である（設立当初は共同通運㈲）。設立当初は石膏原料や食品輸送を行っていたが、チルド定温配送を行うようになったほか、工業製品や医薬品の輸送も手がけるようになっている。

同社は船橋市内に本社を構えるほか、市原（市原市）、袖ヶ浦（袖ヶ浦市）、千葉（佐倉市）、印西（印西市）、相模原（神奈川県相模原市）の５営業所体制となっている。また、市原営業所に隣接して、自動車の整備・点検や中古車販売などを手がける市原整備工場もある。

市原、千葉、相模原の各営業所ではスーパー等への生鮮品・食品輸送を手がけるほか、袖ヶ浦営業所では石膏ボードや石膏原料を輸送。また、印西営業所では医薬品の輸送を主体としている。

同社には約 100 人のドライバーが在籍しているが、営業所ごとに輸送品目が異なること、また勤務時間も異なることから、全員を１か所に集めた上で事故防止教育を行うことが難しい。そのため、事故防止教育に関しては営業所単位で実施している。365 日 24 時間体制で輸送業務に当たる生鮮品・食品輸送を担う営業所では、集団での教育が特に難しいこともあり、点呼の際に営業所長がドライバーに対して書類を示しながら、日々注意喚起を図るようにしている。一方、石膏原料などの輸送を手がけている袖ヶ浦営業所では、荷主企業から求められる安全レベルが特に高いこともあり、年に３回ヒヤリハット報告会を行っているほか、週に１回安全パトロールを実施するなど、事故防止への取り組みを強化している。

なお、同社では平成 21 年、全車にデジタルタコグラフを導入するとともに、25 年からはドライブレコーダーを導入。昨年９月にクラウド型デジタコに更新したことで、デジタコで取得した５営業所のデータを、本社で日々確認することが可能になった。

髙橋　功　代表取締役

「デジタコを導入したことで、ドライバーの運転を定性的に見ることができるようになりました。また、ドラレコは前方と車内を撮影できるタイプに更新しており、事故が発生した際には営業所長とドライバーが一緒に動画を確認した上で、何が事故の原因なのかをドライバーに理解してもらい、事故防止に繋げています。デジタコとドラレコは、安全性向上には欠かせないものだといえるでしょう」（髙橋社長）

同社では、ドライバーの労務管理においてもデジタコを活用している。かつてはドライバーの手書きによる運転日報を使用していたが、運転日報だけではドライバーの乗務時間や休憩時間、作業内容などを正確に把握することが難しい。クラウド型デジタコを導入したことで、各営業所のドライバーの実際の動きが把握できるようになった。

今年４月から、ドライバーに対して罰則付きの時間外労働上限規制が導入されたほか、改正改善基準告示の適用が始まった。デジタコを通じてドライバーのリアルな働き方が見えるようになったことで、ドライバーの長時間労働改善に向けた具体的な施策を打つことができる。

なお、髙橋社長は月に数回、TEAMS を利用してチャットで所長と会話し、ヒアリングを行うことで所長との会話の機会を増やしている。また、月に１回営業所長を集めて営業会議を開催しており、新型コロナウィルス感染症の拡大を機に WEB 会議を採用したことで、営業所の業務負担を減らし効率化を進めることができたという。Web 会議の際には、デジタコのデータや、安全と運行についてなど、同社の様々な経営情報をクラウド上で各所長へと発信し、適応できるように慣れてもらうことを進めている。営

印西営業所所属のトラックは、主に医薬品輸送に活躍している

Web 会議形式で営業会議を開催し、営業所長のスキルアップを図っている

髙橋社長は従業員に対し、同じ方向性に向かって事業を進めることの重要性を訴えてきた

業所長が様々な経営情報を確認した際には、髙橋社長への返信義務を課し、営業所長に対して業務改善や業務効率向上に役立つ施策の立案を促している。同社では、DX 化によって課題解決へのスピードを高めるとともに、各営業所長が改善のための施策を考えるようにしたことで、各営業所長のスキルアップと業務の先進化、簡易化、効率化を進めようとしている。

髙橋社長がいま最も力を入れているのは、各所長の対応力の向上である。同社は「営業所がそれぞれ１つの会社として業務を行う」形態を採っており、営業所長の役割は非常に大きいものがある。例えば、改正改善基準告示を遵守する重要性をドライバーに説明できなければ、改善基準告示違反が常態化してしまい、行政処分を受けることでその営業所は事業が継続できなくなってしまう。そこで、髙橋社長は管理職として相応しい営業所長となるような組織化を進めている。

「当社では、組織化と DX 化を進め、会社の中身をガラス張りにしていくことを目指しています。経営が可視化され、売上や現金といった数字の動きが、経営者だけでなく各営業所長や運行管理者、そしてドライバーの頭の中に入ることで、会社の成長スピードを一段と加速させることができます。例えば、燃料費などのコストを軽減させることで、会社の利益が増え、ドライバーの給料に反映させることができます。『どのようにしたら手取り額が上がるのか』をドライバーが知ることで、自分たちが日々どう働けばいいのかが見えてくるのです。そして、それをドライバーに分かりやすく伝え、行動できるようにするのは、現場の責任者である営業所長なのです。運送事業者としては、日々の業務の中で上がってくる様々なデータをスピード感もって分析した上で、輸送効率化に向けた改善を継続し、何としてもドライバーの手取り額アップに繋げていく必要があります。ただ、『輸送の効率化によって利益が確保できたから、給与を上げる』のでは遅いとも感じています。今では現状の収入を上げなければ、ドライバーはやめてしまいます。組織化と DX 化、そしてドライバーの労働条件改善は、運送事業者が今後も事業を継続していく上で欠かすことができない経営課題だと考えています」（同）

髙橋社長は、大学卒業後に検査会社のエンジニアとして 14 年勤務したのち、父親である先代社長や同社の従業員に懇願されて平成６年に同社に入社。以来、副社長として先代社長を支えながら、ドライバーとしても活躍していた。翌７年に有限会社から株式会社に組織変更し、その後も輸送業務の多角化など業容拡大を続けてきた。22 年に 51 歳で、80 歳になった先代社長に代わって社長に就任した際には、２代目社長として大きな覚悟をもって会社を引き継いだという。

経営面では、「足元を見ながら会社の先を見る」ことの重要性を感じているという。現状の姿が分からないままでは、会社の未来を見据えることは難しい。髙橋社長は副社長時代から、「見える化」への取り組みを重ね、営業所長などの管理職やドライバーに対して現在の自社の立ち位置を理解してもらうとともに、「将来会社が目指すべき姿」を明確にし、全員が同じ方向に向かって事業を進めることの重要性を訴え続けてきた。

「経営を続けていく中で厳しい局面も多々ありましたが、諦めないで続けることが何よりも重要だと考えています。また、千葉県トラック協会の会員活動を通じてできた仲間たちも、大きな心の支えになりました」（同）

現在 64 歳になった髙橋社長には、33 歳の息子がいるが、現在は運送業界以外の仕事に就いているという。「今後も当社の組織化、DX 化を通じて『見える化』を進め、息子が『跡を継ぎたい』と思えるような会社にしていくことが、目下の目標です」と、髙橋社長は笑顔を見せた。

ホットにゅーす

■夜空にきらめく天体と風景を写し込む「星景写真」撮影を楽しむ

髙橋社長の趣味は写真撮影である。中でも、星景写真を撮るのが好きで、夜空を彩る様々な星座を撮りに、小湊鐵道の沿線や犬吠埼に出かけることもある。また、雲の情景や、花火を撮影することも多いという。

「星景写真は、美しい自然風景と星々の輝きを組み合わせることで、幻想的な世界が表現できます。その美しさに魅了され、星景写真の撮影を続けています」（同）

写真が趣味の髙橋社長。雲を撮ろうと、空に向けてカメラを構える

企業プロフィール

共同通運株式会社

代表取締役　髙橋　功
本社　千葉県船橋市本町 5-13-12-101
従業員　100 人（うちドライバー 80 人）
台数　85 台